大正十四年七月一日（第三種郵便物認可）
昭和三年八月十五日發行（毎月一回十五日發行）

光明

第十卷第八號

一心にもつぱら
彌陀の名號を念じ、
行住座臥、時節の久近を問はず
念々に捨てざるをば
これを正定の業となづく

（善導大師）

大眞日本宗
光明團本部發行

大正十四年七月一日（第三種郵便物認可）
昭和三年八月十五日發行（毎月一回十五日發行）

光明　第拾卷第八號　【定價金拾錢】

◆合掌宣言

第一、我は之れ久遠劫來の業苦に憫む、されど、傷き痛み憫める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我はこれ曾無一善唯一作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生き給ふみ親鸞惡深重煩惱熾盛の我を共まゝ救ひ給ふ。

第三、真まれたる隣人も亦、久遠の業苦に共泣する慘ましき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたまふ永遠の光明。聞かせん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。

第四、希くは自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生きん。

第五、「四海の信心の人は皆兄弟」其處に共存の涙わく。共に和ぎ、慰藉し、篤勵して、相愛に生きん哉。

◆本領

興奮褒貶に動ずるなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に進せよ。

救はれたる者は立つて、全人類救濟のために、熱と血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために、渾身の社會に猛進せよ。

巻頭の叫び

一すぢの道あり、
この道、現實より淨土に通ず、
一切群生無限の苦惱の底に、
靜かに必然に流るゝ、至純の業力
處を超に、時を越に、人を超りて、
永遠に輝くたつた一つの本尊、
滅ぶべき一切の群生を乘せて
永遠の淨土にはこぶたつた一つの力
この力全人格の上に動けば、これを『信』といふ、
如來は信なり、
我も信なり、
彼我一体の信、こゝに永遠の生命動く。

惶怖强決

住岡狂風

本文つづき

『死を怖れて直に走つて西に向ふに、忽然としてこの大河をみて、すなはち自ら念言すらく、この河南北に邊畔をみず。中間に一の白道を見る。きはめてこれ狹少なり。兩岸相去ること近しといへども、何に由りてか行くべき、今日さだめて死せんこと疑はず。まさしく到り廻へらんとすれば、群賊惡獸、漸々にきたりせむまさしく南北に避けはしらんとすれば、惡獸、毒虫きそひ來つて我に向ふ。まさしく西にむかひて道をたづねて、しかもゆかんとすれば、また恐らくはこの水火の二河に墮せん。其時に惶怖することまた言ふべからず。すなはち自ら思念すらく、我今廻るともまた死せん。住るともまた死せん。去くともまた死せん。一種として死を免れざれば、われ寧この道を尋ねて前に向ひてしかも去かん。すでにこの道あり。必ず度すべしと。……』

空曠の野に

人一人ゐない寂しい無限の曠野になげ出された旅人……それは已を知る者の相でありました。何處から來たかそれさへわからぬ、久遠の輪廻、何處へゆくのか一寸さきすら量り知られぬ灰色な今、それさへ知らぬ昔なら、呑氣でもあり平氣でもあつた。しかし今はすでに大地の上の一切の相と、我が心内の恐ろしさを知りはじめて來た。後には群る惡賊の追迫の聲、牙かみならす惡獸のほゐる聲が念々刻々、我を害せんとする。

救ひがある。西にゆけ！

けれど見よ。其前途には、火の河が南に、水の河が北に、一つは炎々として燃え上

り、一つはものすごく波打上げてゐるではないか。其間に一つの白道がある。けれど其幅は僅に四五寸、火はこの白道を燒き、水はこの白道をうるほす。果してこの白道は我をたすける道であるかどうか……（前號大略）

死を怖れて

『此の人、死を怖れて西に向ふに……』

外、人の誘惑、內、自巳の惡業、こんなことでどうするのです。刻々にすりへらされるこの慧命、私はどうなるのだらう。地獄、餓鬼、畜生、三塗に永く沒して出る期のないこの身をどうしよう。

活路！　ほしいものは活路である。生きる路はないか、のがれる道はないか。

厭離穢土、忻求淨土、苦惱のない世界がほしい。穢土だ、惡魔の國だ。さうだ行かう。一時もじつとしてゐられるものか。

衷心よりわきかへるこの願ひ、夜もこの心に迫はれる、晝もこの心に責められる。ぢつとしてゐられるものか。あゝ痛ましい戰ひだ。忘れることの出來ない心の聲である。

こゝまで來た時、求道は本筋にはいつたのであります。釋尊にもかうしたやむにやまれぬ願ひがあつた。親鸞聖人は勿論であります。求道の途に上つたこれらの聖者たちは、決して人に動かされ、すゝめられたのではない。學者になるためでも僧位を得るためでも、地位名譽を求めるためでもなかつた。唯ほしいものは、かうしたせつぱつまつた自分の根本的解決のためでありました。

死を怖れて直ちに走る……　何たる悲痛の文字であらうぞ。死を見る者にほしいのは活きる道である。活きる導はないか。彼は直ちに走る。

必定の死

旅人は今、忽然としてこの火と水の二つの大河を見て、すなはち自ら念言します。

『この河には南北にほとりがない。中間に一つの白道が見える。しかし極めて狹い東の岸と西の岸とあひ去ることは僅か百歩だけれど、どうしてこれが行かれようぞ。今日さだめて、こゝで死ぬるに疑ひはない……。』

大河は忽然としてあらはれました。貪慾の水の河、瞋恚の火の河、今迄、問題にもしなかつたこの二つの心が、かくまでに、深かつたのであらうか。百歩とは一生涯百年である。南北にはほとりがない。深くして底がない。然もそれは今、我等が眞實の淨土に至らうとする時、忽然として表はれたのである。無かつたのではないのであります。今迄は見になかつたのである。問題にならなかつたのである。我等の生活、それは無明煩惱の生活である。欲心こそ我等の生活の核心である。財慾、名譽慾、色慾慾をはなれては生活はない。我等の苦しむのは、この慾心がもとである。若しこの慾心の滿足の前に障害物が現はれるや、忽ちに瞋恚の炎は燃にあがる。あゝ恐るべき慾心よ、怖るべき瞋恚よ、これあるがために、地獄が表はれる、餓鬼道が生れる。

貪欲、瞋恚、愚痴の三毒の煩惱に惱まされて何も考へず。求めず苦から苦に、暗黑から暗黑に流轉する處に凡夫の輪廻がある。

『三毒の煩惱を滅ぼせ！　其處に惱みならぬ世界が開ける。』

さうした敎へが我等の心を捕へる。聖者にはこの惱みはなかつたのであらうか。救はれたといふのはこの心の仕末がついたのにちがひない。或人は言ふ『それが救はれない相だ。俺たちには、慾心はない。家も捨て、財も棄て、こうして街頭に托鉢してゐる。救はれるとは、この慾心や、瞋恚の心の無くなつたことだ。』旅人はすぐそれに共鳴する。

この醜い心でどうして眞實の淨土に往かれませう。

しかし考へれば考へるだけ、こゝろの中心には、ぢつとしてゐられぬ願求があります。この願求が熱烈であればあるだけ、二つの河が見にて來ます。願生心、貪瞋二河

の間の白道、それはある。しかしそれは極めて狭小である。どうして、この四五寸に見える白道に足をふみこんで安心して行かれませうぞ。

かつて聞いたことがある。このような私のために、かうも切迫した私のために阿彌陀如來のお救ひはあるのだ。このまゝゆけばよい。この醜い心のまゝで助かるのだとしかし、それが信ぜられない。一寸は清淨な心になつたような氣もする。説教に感激した時は、救はれて、聖者になつたような氣さへする。念佛を申しても、心から感謝の雄叫びのように感ずる、これが救はれたのだ。この感謝とこの懺悔が救はれた證なのだ。私はもう、昔のような凡夫ではないのだ。足が虛空を歩くように歡喜したこともある。しかしそれもまた、一時の感激の幻にすぎなかつた。さめて見れば、私は再び、灰色の苦苦と疑惑と、重い罪惡に沈潛してゐるではないか。

『兩岸あひ去ること近しと雖、なにゝよつてか行くべき、今日さだめて死せんこと疑はず……。』

東の岸と西の岸、生死の巷と、永遠の淨土、それは、觀無量壽經には、『此を去ること遠らず』と云つてある、それは近い。しかしどうしたらいいのだらうか。何によつて行けばよいのか。私にはそれがわからぬ。今日は定めて死ぬるのだ、疑ひなく死ぬるのだ。私はたすからない。永劫の苦を出でることが出來ないのだ。

絶望へ

しかしぢつとしてゐることは出來ません。どうにかせなくてはなりません。いつそのこと、西にむかつて救はれの道をゆくより、後にかへろうかしら。善をはげみ、德を修めたら、あまり惡い所にはゆくまい。彼は、人天の善趣に住して、はじめに厭ふた所にかへつて生きようとします。宗教がいるものか。道德を守ればいいではないかそんな考へも苦しまぎれにはおきて來ます。善導大師はこの心を『正欲到廻』と云つてゐられます。五戒十善を持つて、人天の果報を求めようとすることだと先哲

たちは意味づけました。

然るにこの考へが正しかつたでせうか。善導大師は『正しく到り廻らんとすれば、群賊惡獸漸々に來り逼む』と申されます。

心の内にまきおこる惡魔は、益々其威をたくましうします。そしてこの人間の世界にかへることすらもう出來ませぬ。さめたる心は如何ともすることは出來ません。後にかへろうとすれば、群賊惡獸が漸々に來りせめます。

そのときまた一つの道が考へ出されました。それは二河にそうて南か、北かへ避げ走ることであります。先哲たちは、この『南北避走』とは聖道の頓漸二教、大小二乘を求める心とされてあります。

聖道自力によつて自らさとりの道にゆかうとすることであります。親鸞聖人二十年の求道修行、法然上人一切藏を五度の御勉學もこと〳〵くこの聖道自力のさとりでありました。佛である、菩薩であるとの自覺、佛心の開顯、六度の行、三密止觀、其處に崇高なさとりの道があります。しかし一切群生の惱みといふ惱み、愚さといふ愚さに徹する時、果してそれが萬人のゆくべき大道でありませうか。色即是空の理はわかる。平等即差別の哲理も尊い、淨穢不二の教へも理解が出來る。しかし糞と味噌とが平等ではない。美人は美人に見に、醜婦は醜婦にしか見にない。善人は好き、惡人は嫌ひ、平等の大慈悲など出さうにもない。みれば見るだけ、現實の醜さが見にる『定水をこらすと雖、識浪しきりにおこり、心月を觀ずと雖、妄雲なほおふ』とは聖人一人の悲歎ではありますまい、避げようとしても逃げられず、其を棄てようとしても棄『たりませぬ。善導大師は申されます。

正しく南北に避け走らんとすれば、惡獸毒虫、競い來つて我に向ふ。』

横川の源信和尚は『妄念は凡夫のぢたいなり……妄念より外に心ばなきなり。……臨終まで一向の凡夫にてあるべく候。』と云はれます。

こゝに自力のはからひや、私の分別で永遠なるものを創造しようとする望みも絶に

ました。

殘る道はたつた一つ『西に向ひて道を尋ねて去く』ことであります。けれどもこの信心一つといふ道も、未だ信決定であります。四五寸の白道をどうして行かれませう強いてゆけば『復おそらくは此水火二河に墮せん』であります。この時、彼は全く疑ひの子であり、恐怖の人であります。かくして彼の世界はだん〳〵と一切の技巧から方便からつきはなされてゆきます。

正しく西にむかつて道をたづねて行かうとすれば、この貪瞋二河の難を思ふ時、旅人は全く困つてしまひます。

『時に當つて惶怖することまた言ふべからず……。』

彼に見舞つたものは、たゞおそれだけであります。進退全く谷まつたのであります

ゆくべき道がわからぬ時、我等に與へられるものは唯不安であり『惶怖』であります

煩惱は熾盛であり、罪業は深重であり、示された聖い道と自分との間には手のとゞき

さうにもない隔があります。生死の苦海を度せんとすればするだけ『今日定死不疑』の心は胸を暗くせしめ、出離の方便なき相をおそれずにはゐられませぬ。

三　定　死

『すなはち自ら思念すらく

我今廻るとも亦死せん

住まるとも亦死せん

去くとも亦死せん

一種として死をまぬかれざれば我寧この道を尋ねて前に向ひてしかも去かん

既に此道あり。かならず度すべしと。』（本文）

何たる悲痛な目覺めであらうか。彼は今や全く死地に身をおいてこの思ひをするのであります。我々が人生に生きてゆく時、幾度かかうした行詰りを感じます。信仰の

世界では眞面目な求道者の多くがかうした苦しい死地を發見します。易々と惠まれてゆく人もありませう。しかしすでに眞實の信は極難信だと云はれてあります。いい加減に胡麻化しておけばいざ知らず。眞に我等が、生死の一大事を提げて、實眞の生活態度は如何に、滅ばざる唯一の道は如何にと、眞劍に求めてかゝる者は一度はこの機を見つめて泣く日があるのであります。

旅人は今、思念してゐます。『我今廻るとも亦死せん……住まるとも亦死せん……去くとも亦死せん……。』必定の死であります。足の立て場はありません。人天の善趣に止まらうとすれば群賊惡獸、聖道に到り廻らんとするも、群賊惡獸、者佛淨土に避げ去らんとするも。惡獸毒虫、去つて淨土に往生せんとするも、火の河、水の河であります。絶對絶命、彼はもはや『死』以外の何ものもありませぬ。

しかしせつぱつまつた者は、活路を求めます。生きておる者はこの場合ぢつとしてはゐられません。彼はこの悲愴なる目覺めのどん底に一大飛躍の大勇猛心をこきおこします。

『一種として死をまぬかれざれば我寧この道を尋ねて前に向ひてしかもゆかん。既に此道あり必ず度すべし。』

彼の行くべき道は唯一です。たとひ四五寸であらうとも、火と水とは燒かうと、亡ばさうと彼は今やこの唯一の白道に足をかけるより外に道はありません。

しかし彼はまだ如來の招喚を聞いたのではありません。眞實の善知識の發遣も聞きません。ですから彼はこの大道が眞に大道であることを知りません。彼は今や、彼の自我のはからひのありたけを出して、この世界をのがれようとするのであります。彼の自力の精一ぱいで救ひの世界にもがき出ようとするのであります。

宿善漸く熟す

其時の彼は全く功利主義の人であります。眞實を求めるといふよりも彼はこの一切かも救はれるために自力の建立に必死になる相であります。

稱名を力にするのは二十願の世界であります。聞いたことや、喜び心や、わかつた心や、樣々の自身の心をあてにして浮ばふとするのも二十願眞門念佛の臭味であります。我執をもとに功利主義の考へしかしない凡夫は。自分の機の眞實も、法の眞實も知りませぬ。ですからどうにかして淨土往生の身にならうともがきます。またなり得たとかためます。

すでに此道あり、必ず度すべし』と決定の云葉を聞けば、これ眞實の金剛の信心のようでありますが、これは全く二十願の心持ちにすぎませぬ。我等は常にこの自力建立の信にだまされます。行者が如何に堅くなつてもこの、小我のはからひによつて作られた信は、永遠に動かぬものではありませぬ。

信に徹底した△△師は一人の同行に語つてゐられます。

同行『私は永年寺參り致しましたが、私の自力では助からないことがわかつて如來樣のお慈悲一つで助けて頂くのだとそれだけを力にさして貰ふてゐますが、これでよろしう御座いませうか。』

△△『駄目です。それでは眞の信心ではありません。』

同行『それではどうすればよろしう御座いますか。』

△△『その心ではどうしても駄目です。』

同行『それでは私は助からぬことになります。どう聞いたらよいのですか。』

△△『どう聞いたのもいけない。どうなつたのを力にしても自力です。』

同行『それでもどうにかならねば、淨土へ往生させては頂けますまい。』

△△『さうだ、あなたは、自分も知らず、如來樣の招喚も聞かずに、是非ともお淨土へと力を入れる。其力みの上に色んとひきかぶつて出かけようとすればするだけ自力です。上に上にと心の方向をとつてゐる、その我身知らずの邪見がわからない

のか。』

同行『邪見な奴で御座いますが、そこがそのまゝ助かるのではありませんか。』

△△『それもあなたが、一人ぎめの邪見です。あなたが、このまゝと一人ぎめして住まつてつまるものか。』

同行『私は苦しんでゐます。どうなればいゝのですか。』

△△『どうなつても駄目だとあれだけ云つてもわからぬのか。』

如來樣の御本願の御力で助けて下さるのです。』

同行『はい。それでは如來の本願の御力だけで御座いますか。』

△△『さうです。南無阿彌陀佛のお力一つで助かります。

同行『どうも、それだけではものだりない氣がします。私の心はあまりに、惡い心をしてゐます。少しは有難い心や、お念佛が稱へられねばと思ひます。』

△△『それよりも先きに、もつと大事が横たはつてゐます。罪業の深い私どもは、いづれの行でも助からない。さればこそ、本願のお他力だけで助けて頂くのです。如來の本願より惠まれた御名號一つで助かります。』

同行『それではこのお念佛だけでまいれますか。』

△△『さう條件づけるのではありません。』

同行『どうすればいゝのですか。』

いくら聞かされても、語られても御同行は自力の手をはなしませぬ。これこそ、如來彼岸の招喚の聲を聞かぬ、旅人が、この三定死のいきつまりに立つて『我いま廻るとも亦死せん、住まるも亦死せん、去くとも亦死せん、一種として死をまぬがれざれば。我寧此道を尋ねて前に向ひてしかも去かん、既にこの道あり必ず度すべし。』と自力强決して死地に活路を求めようとする死物狂ひの相であります。しかしこゝまで進んだ彼は、はからずも眞の善知識を通して、如來眞如の門に轉入します。宿善の華はまさに開けようと致します。（つゞく）

本尊

□

……私に惠まれるたつた一つの眞實なる生活態度を『信』の世界と申しておきませう。信の世界は私といふ人格の或る一部分の上に構成されたり、一時の感情の動きや或る時の氣分の上に許される世界ではなくて、實に全人格の上に開かれる世界であります。

ですから信は全人的自覺の世界であります。全人的な目覺めは唯、如來によつてのみなされゆく、私に惠まれる唯一の世界であります。櫻が櫻と咲くのに二つの相はありません。私の上に惠まれる眞實に二つはありません。勿論親鸞聖人も、其信じられた宗敎は淨土眞宗といふ一宗でありました。淨土眞宗と云へば、禪宗とか日蓮宗と列んでゐるやうであります。事實敎團があつてそれ〴〵對立して存在してゐます。然れば限られた一宗であつて、他と對立する以上、何宗に行つてもいいではないか。何宗にいつてもいいのなら唯一の世界ではないではないか、全人的自覺の世界ではないではないかとも考へられます。しかし若し宗敎がさうしたものであるならば決して私にとつて絶對なものではなくなります。若し自分の宗敎を我田引水的に我執し主張するならば、それは凡夫のきたなさであつて、純粹な世界ではなくなります。

此の意味から申しますと、聖人は、固形化された型を執へて我執されたのでもありません。又各宗はどれだつてつまり同じことだ、だから其眞髓をとつてゆく態度だ等と大ざつぱに利用されたのでもありません。といつて一宗に我田引水的に執着されたのでもありません。

強いて云ふならば、聖人は一切を越えられたのです。地上一切の人間が造つた狹苦しい囚を全部出で、自然の虛空に飛躍されたのでありました。其處は盡十方無碍光如

來の光明界であります。信はかくして必然の世界であり、無條件の慈界であります。救ひを体驗するとは、條件づけられた世界に私をくゝることではなくて、一切のはからひや、有無の我執が間にあはぬ、廣大無邊な信心海であります。おそらく人間はこの世界を知らないことには救はれることはありますまい。信は唯一絶對の世界であります。

□

聖人のこの信の境地は決して聖人の獨斷で成立ちませんでした。聞くといふこと機の眞實に卽して一つなる眞實なる敎を聞くといふこと、それ自身が信の世界を廻向してゆきます。わが機の罪障深く出離の緣なきことが、敎の眞實を決定します。如來の本願は如何なる善惡の凡夫でも一人一匹もれなく救ふと云ふ、無條件のお救ひを打出された大無量壽經こそ、人類に與へられた唯一の生命の書でありました。絶對の眞實敎でありました。

□

本尊のない生活、それは決して生活ではありませぬ。私の人格を無限に統一するものは私は本尊あります。

『あなたには、身も心も打ちこみ得る、一生涯を捧げきることの出來る御本尊がおありになりますか。』と問はれた時、萬人が萬人、はいと答へ得るでせうか。昨日の生活の中心と、今日の生活がちがひ、昨年と今年とそれがちがひ、風の吹き方一つで、その時、その場合で變つてゆく、それは哀れな幽靈生活であらねばなりませぬ。昔からの聖者たちは、眞實に仕へる熱烈な心をもつてゐられました。何物をもつてしても、動ずることなき唯一なる本尊に奉仕した方々であります。

大概のことはゆるしてもいい、自分のことであるならば、ふみにじられやうと、誹

られやうと、傷つけられやうと彼等はよく忍辱の日を送りました。さうです忍ぶといふこと、それは聖者たちの共通な生活態度でありました。しかし若し彼等の奉げる、本尊が傷つけられる時、彼等は生命すらなげ出し、血さへ捧げていとひません。身も心も捧げてゐます。キリストと十字架、首の座と日蓮上人、念佛禁制と法然、親鸞兩聖人……皆なたつた一つの本尊の前には死を肯定してゐました。

汝に身も心も捧げ得る本尊があるか？

金か、地位か、名譽か、女か……それを迫ひつゞけて、それを本尊にしてゐるのが目覺めざる凡夫です。果してそれが、究極の唯一のものでありませうか。

□

聖人は大無量壽經によつて、如來の本願にあひ、名號を護得されました。さうして唯一の本尊である、盡十方無碍光如來を發見されました。

信の世界とは、この本尊の立ちます大地であらねばなりません。

私どもは、名もなき、惠まれぬ小き凡夫としての存在であります。何ほこることも出來ぬ哀れな肉塊であるかも知れません。しかし、私どもゝ今、この大經のみ法に遇ひました。さうして私にも又、この唯一の本尊が、疑の雲の晴れゆくに從つて、拜まれるのでした。生きる價値が其處に與へられたのです。死んでもいい、身も心も捧げお仕へする、唯一の世界はこの、本尊の廻向によつて成立つたのでありました久遠の親にてまします本尊の前に合掌せる聖人をしのばずにはゐられませぬ。

舍利弗と目連（二）

世尊は、竹林精舍を出て西の方、ベナレスに行き鹿野苑に滯り給ひ、未だかつて何人によつても又いかなる所にても轉されたことのない、無上の法輪をお說きになりました。即ち四諦をお說きになりましてやがて比丘等に向ひ

『舍利弗と目連を崇めよ。舍利弗は生みの母のよう、目連は養ひの母のようである舍利弗は初心の者を育て、目連は引き上げて覺に至らしむる。舍利弗は四諦の法をよく說き顯すことの出來る者である。』

と宣ふて坐を立ちその室にお入りになりました。

間もなく舍利弗は、大衆を顧みて世尊の說き給ふた、四諦の法を說き初めました。即ち苦諦と集諦と滅諦と道諦とが說き顯はされました。

『友よ。苦諦とは何であるか。生も苦、老も苦、死も苦、愁、悲、苦、憂、惱、もすべて苦惱である。求めるものを得ざるも苦惱である。略して言へば生存するそのことが苦みである。

生とは何か？　各々の衆生がそれ〴〵の衆生の仲間に生れ、境界をとるのを言ふのである。

老とは何であるか？　齒落ち髮白く次第に老ひ行き、命縮り身體のおとろへることである。

死とは何であるか？　身體の組織がくづれこの五體がほろぶことである。

愁とは何であるか？　災に遇ひ、苦にあひ、憂ひ悲み內心痛みうづくを言ふのである。

悲みとは、何であるか？　炎にあひ苦惱に觸れ等して、愁傷し哀哭することである

苦みとは何であるか？　体のうける苦みである。

憂ひとは何であるか？　心のうける苦みである。
惱みとは何であるか？　炎にあひ、苦に觸れ、心が挫け望みを失つた有樣である。
欲するものを得ざる苦みとは何であるか？　この体が生まれるべきものであつて、生まれまいと願ふはそれである。同樣に老ひ、病み、死に、憂ひ悲み苦み惱むものであつて、それ等のないようにと願ふことである。
略して云へば、この生存のあることが苦であるとは何かといへば、もとこの生存は煩惱の生むところからである。
次に集諦とは何であるか？
未來の新しい生存をまねく所の愛の渴き即ち、欲愛と生存の愛と斷滅の愛の三通りである。
滅諦とは何であるか？　その渴愛の苦みが全部滅んで煩惱のなくなつたことである
道諦とは何であるか？　即ち滅諦に至る道であつて我々の現實が苦惱なることがわ

かり、その苦みは愛の渴きから來てゐることを知り、苦ならざる滅諦に至らねばならぬことがわかつて來る。そこに開かれて來た滅諦に至る道こそ、道諦の八正道なのである。
八正道とは即ち、正見（正しいもの、見方）正思（正しい思想）正語（正しい僞らざる言葉の表現）正業（正しき行爲）正命（正しい生活）正精進（惡を捨て善を取入るべく努力すること）正念（熱心に思ひ正しく心直くして物を觀察すること）正定（欲をはなれ惡をはなれ第一第二第三第四禪に入つて住することである）
大衆よ。これが如來に依りて說かれたる四諦の法である。』
と說法しました。

□

世尊はまた諸の比丘をつれて祇園精舍にお入りになりました。或日舍利弗は比丘等

に向ひて語るよう

『友よ。世に四種の人がある。それは内に垢を持つてゐながら、それを如實に知らぬ人と知る人と、また垢を持たないでそれを如實に知らぬ人と知る人とである。この垢を持つ二人の内、それを如實に自覺せぬ者は劣り、如實に自覺するものは優る。これと同樣にけがれをもたぬ二人についても、その自覺の有無によりて勝劣がわかるのである。』

此時、目連が舍利弗に云ふやう

『友よ。その勝劣の理由は何であるか？　どうして勝る、劣るといふことがいはれるのか。』

『友よ。それはこういふ理由である。垢を持ちながらそれを如實に自覺せぬ人には、それを除くために心を決め勵みいさむといふことがない。從つて貪り、瞋、愚の垢のまゝに死ぬるのである。たとへば、汚れた眞鍮の鉢を市場より買つてきて、洗い清めず、汚れたまゝほつておけば、益々汚れが增すやうなものである。それと反對にそれを如實に知る人は、それを除く心をおこして勇みはげむから彼は、貧、瞋、愚はをなれて垢れに汚されることなくして命を終るであらう。

たとへば、汚れた眞鍮の鉢でも市場から買つてきて洗へば美しくなるようなものである。

又垢がなくてそれを、如實に自覺せぬ人には、ともすれば自巳の意のまゝの相に思ひ耽り遂に煩惱の囚れとなり、瞋と愚に見舞れて垢をもちながら命を終るやうになる。たとへば美しい眞鍮の鉢を市場から買つてきても洗ふことなしに汚れのまゝ隅の方にほつておけば汚くなるやうなものである。

汚れがなくて汚れのないことを如實に知る人は自分の意に叶ふ善いすがたに思ひ耽る恐れなく汚れた煩惱の囚とならずに命終るであらう。

たとへば美しい鉢を市場から求めてきて洗い清むれば益々美しくなるやうなもので

ある。

目連よ。私はこの理由で勝る劣るといふのである。

友よ。私が垢れといふのは、善からぬ欲望のことである。罪を犯しながら『罪が知られぬやう』に願ひ、罪を知られても『密に注意をうけたい大勢の中で注意をせられたくない』と望み又は『仲のよい人に注意をうけたい、他の人からは注意をうけたくない』とのぞむのが垢である。この思ひのまゝに行かぬ時に怒りいらだつのである。

又人から供養を受ける時、自分一人が受けたいと望むのも、垢であつてその思ひのまゝにならぬ時、怒るのである。

友よ。如何なる人でもこの善からぬ願をはなれねば自然と他の人に知られる、そふなれば彼がたとへ粗衣、粗食に頭陀の行を修すとも、他人の敬ひをうけることは難い。たとへば眞鍮の鉢を市場から買つて來てその中に蛇や犬を入れて他の鉢のふたをして再び市場に入り人々は如何なる珍らしいものかと、ふたを開いて一度いやな思ひをするやうなものである。

又この善からぬ欲望をなくしておればそれが自然に他に知れその人が貧しい村に住み、粗衣粗食に身をやつすとも人々は敬うのである。それは恰も洗ひ清めた眞鍮の鉢を市場より買つて來てそれに眞白な米飯をもり肉汁を添へ他の眞鍮の鉢をふたとして再び市場に入るとする人々は中を見てたのしい食欲をそゝられるやうなものである。』

その時、目連は云ふやう

『舍利弗よ、私が或時、町へ朝早く托鉢に出ると、車作りの弟子が力一杯車の輪を殺いでゐた。そこへ裸形梵士の一人が通りかゝり、じつとそれを見つめて、昔彼が車作りの弟子たりし過去を思ひうかべて次のやうに考へてゐた。

「この弟子は今車輪を削つてゐるがあの、くぼみ、ゆがみ、ふし、を殺ぎ去るのであ

ろう。そうすると車輪はよい部分ばかりでしつくり結びつくであらふ。」

そうしてゐる間に車作りの弟子は車輪を作り上げてしまつたので、裸形梵土は喜びの餘りに我を忘れて

「あゝ、彼は丁度、私の心を知つてゐるやうに私の思ひの通りに車輪を削つた。」

と叫んだことがある。

友よ。かようにあなたは生活のために出家して、庵飾をふるまひ輕躁にて心の亂れた比丘の心を見通してゐるやうに殺ぎとられた。信仰によつて出家し熱心な智慧ある比丘はあなたの說法をきいて飢へたるものゝ食ふ如く喜ぶのである。實にあなたはよく同學者をして不善を去り善にたゝしめたのである。』

二人は互にその說く所を善びあひました。（つゞく）

講演の旅

◇七月十三日。佐々繁白道君と一緒に加計町佐々木宅出發、山縣郡筒賀村願正寺へ着いた。丁度其時二川淺雲師は日中說敎の最中、二川師は十一日夜から來てゐられる。

御住職は信と力の人、伊藤龍雲師。數年間再會を期しつゝ、どうしても會へなかつた。來れば不在、來て下されば留守中、私たちは會つたのだ。涙ぐましい感激、身も心も一つ信の世界にとけてゆく。二川師の說敎がすむ。熊野以來の再會である。これからの私たちの間が如何にどんなに幸福なものであつたか一共晩から私は三願轉入について語つた。加計町、戸河内其他から熱心な求道家か、數里の道もいとはず來聽する。求道家でないものにどうして眞の信が喜まれよう。二川師も伊藤師も求道家である。時代を知り。社會を知り。人を入れ得る求道家である。二川師は十五日の日中きりで歸つてしまふ。私たちは十六日の夜まで御危介になつた。懷しい嬉しい會もおはつて、十七日三時出發、夕方本部に歸つた。

◇十七日、夜赤チヤンの命名の心ばかりのお祝ひ、赤チヤンは早枝子と申します。

◇十八日、朝出發吳經由。賀茂郡小用の池本氏宅につく、池本あや子先生の、三回五回根強い御求めでやつと來ることが出來た。夜は小用說敎場で講演會、十九日は午前中、中切小學校で農女會中心の講演會、すぐ自動車で小用に歸つて、晝と夜と二回說敎場で講演再會を約し、御親切なる皆樣に小舟で送られて川尻港から汽船で宇品へ、廣島へ、

賀茂郡南部への最初の光明團の進出である。將來第二第三の池本先生の出現を願ふること切。

◇二十一日　二十二日、豐田郡河内町。相互修養會主催講演會。中河内教員住宅にて。川本要氏等を中心と

する希望社の會である。川本氏宅がおやど、二日間多數の來聽者があつた。同會の發展を祈りつゝ、釜瀬君と廣島へ歸る。

西條驛で、臺愚狂、區川映徹兩君と同車、一緒に本部に入る。

◇二十三日ヨリ二十六日マデ、佐伯郡津田支部。二十三日午後、臺氏と共に廿日市にむかつて電車、自動車へ津田村西福寺へ入る。昨年の夏から滿一ヶ年、種々の事情で講演會が延んだ。

木村は普選で縣議選擧が行はれて後、人心一變、不安動搖、極めて危險なる情態におかれてある。西福寺住職高津持龍天師は上京中、幹部の御苦心の程察せられる。唯一人になつてもと腰强く默して精進する信の人々を津田村のために期待せずにはゐられぬ。

二十七日朝出發、本部にかへる。

◇二十八日、釜瀬紫線、臺愚狂、吉藤智水等は東洋大學眞宗會の名義で可部町講演會にゆく。

◇八月例會。炎暑にもかゝはらず、可なりの盛會だつた。

◇八月五日ヨリ三日間、深安郡山野村講習會。三日夜福山市へ、四日午後山野村へ、釜瀬紫線同行。

小學校長羽原正夫氏、光明寺住職吉岡師、村長等の御盡力によつて、第一日婦女會中心、第二日青年團中心、第三日一般村民に對する講習會及講演會、岡山縣後月郡民學校長、友清賢二氏は「農村と妹樂」の題下に、私は「宗教と生活」の題下に、午前四時間、午後四時間の猛烈なる講習會であつた。村中樞が綱羅した意義深い營みであつた。夜は、同村内、田原光明寺で一般に對する講演會が開かれた。水清き山野川にはあゆがおよいでゐるのが見ゆる。純朴な村風、健實な青年男女、嬉しい三日間をすごさして貰うた。神石郡地方からも多數小學校教員の方々もみゐて、有意義な三日間に別れをつげて、七日夕方、吉井町、井原町を經て福山にかへる。九日からは愈〻瓶町の講習會である

お願ひ

一。誌代拂込の際は光明と聖光との區別をはつきりお記し下さい。

一。轉居通知は新舊兩住所を書いて下さい。

一。誌代拂込は振替を御使用下さい。切手は使ぬようにして下さい。やむを得ぬ時は五厘か貳錢切手に限ります。

一。文字をはつきり正確にお書き下さい。

一。主管に特別の用事の外申込中止送金等は一切事務宛に御送附下さい。

一。誌代前金切の時はどうかお早く御送金を願ひますお困りのお方は其旨御申越し下さい。

本誌定價

一部　金十錢（郵稅共）
一ヶ年　金壹圓貳拾錢（郵稅共）

昭和三年八月十日印刷
昭和三年八月十五日發行

編輯兼發行人　花岡靜人
印刷人　佐々木温三
印刷所　光明團印刷部

廣島市八丁堀二十六番地
發行所　大日本眞宗　光明團本部
振替貯金口座下關貳參〇八番